

陳舜臣さんを語る会通信

NO.52 Nov. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年11月20日

"陶展文もの"集合!(続)『割れる』、「縄」三部作、『崩れた直線』『軌跡は消えず』ほか

“陶展文もの”10作といっても長編あり短編あり、初出媒体も、週刊誌あり、月刊誌あり、書き下ろしの単行本もあります。下の「陶展文登場作品一覧」の内、執筆順で、『枯草の根』『三色の家』『割れる』『虹の舞台』は長編で、他は短編です。『枯草の根』は、既に第43号で扱い、前号で『三色の家』と『虹の舞台』を取り上げました。本号では、残りの作品をできるだけ多く紹介したいと思います。

書き下ろし■新聞・雑誌などに掲載せず、直接単行本として刊行されたもの。(編集委員 橘雄三)

《1.「陶展文登場作品一覧」(再掲)》

便宜上、「陶展文登場作品一覧」を再掲します。

	題	初出
1	* 枯草の根	1961年、江戸川乱歩賞受賞 1961年講談社
2	* 三色の家	1962年講談社
3	くたびれた縄	「ミステリー」1962年6月号
4	ひきずった縄	「ミステリー」1962年7月号
5	縄の繻帯	「ミステリー」1962年8月号
6	* 割れる	1962年早川書房
7	崩れた直線	「小説宝石」1969年6月号
8	虹の舞台	「週刊小説」1973年4月6日号 ~6月1日号
9	軌跡は消えず	「小説現代」1983年8月号
10	王直の財宝	「小説現代」1984年5月号
	*は書き下ろし	

《2. 作中時間並びに陶展文の出生年・年齢》

『枯草の根』で登場したとき陶展文は五十歳でした。

陶展文はちょうど五十歳だが、せいぜい四十そこそこにししかみえない。(集英社文庫『枯草の根』p.24)ところで、本作品は1961年、江戸川乱歩賞を受賞していますが、作中時間もほぼ同じ頃と思えます。

作中時間がはっきりし、陶展文のおおよその出生年がわかるのが『三色の家』です。

神田にある中国人留学生寮の一室で、陶展文は顔のうえに新聞紙をのせて、ひるねをしていた。昭和八年、ながい留学生活のすえ、彼はやっと大学の法学部を卒業した。(講談社文庫『三色の家』P.7)

作中時間は昭和八年(1933年)で、はっきりしています。問題は出生年です。当時、通常、旧制大学の卒業年齢は23歳でした。しかし、

陶展文は日本に留学したとき、特設科で一年間日本語を学び、そのあと旧制高校にはいったのである。(徳間書店『神獣の爪』「軌跡は消えず」p.229)

ということで一年遅れています。ですから、大学を卒業したときは24歳で、逆算すると出生年は1909年ということになります。

ただこれは、陶展文が来日までに、日本と同じような学制で教育を受けてきたという前提での話です。

1909年といえば清朝末期です。この頃に生まれ、

陝西の産で、官吏をしていた父の任地福建で育った(集英社文庫『枯草の根』p.26)陶展文の学歴は、中華民国になってからです。政権・政治制度変換期の中国で、来日までにどんな教育を受けたのか不明です。結論として、陶展文の出生年、並びに、中国でどのような教育を受けたのち来日したか、はつきりしたことはいえません。

陶展文の出生は1910年頃としておきましょう。

《3. 晩年の陶展文》

晩年の陶展文が登場する作品は「軌跡は消えず」と「王直の財宝」です。

「軌跡は消えず」から引用します。

「七十になった彼は、誰からも六十にししかみえないといわれていた」(徳間書店『神獣の爪』p.228)

“陶展文もの”最後の「王直の財宝」では、70歳を更に越えていることになります。

陳舜臣さんは1992年、

いま書こうとすれば、八十歳の探偵ということになる。(徳間書店『神獣の爪』「あとがき」)

と、まだまだやる気十分だったのですが、これ以降、“陶展文もの”が書かれることはありませんでした。



台湾TVドラマ『憤怒的菩薩(怒りの菩薩)』のシーン
原作には登場しない陶展文がドラマでは主役

『割れる』 キャッチコピー、登場人物ほか

徳間文庫版表紙&キャッチコピー



神戸で中華料理店を営む陶展文は包丁よりも推理がされる多見探偵。その陶の家の離れに香港から女客・林宝媛が泊ることになった。一族の期待を担ってアメリカに留学した兄が、数年前から失踪、風の便りに日本にいると聞いての来日だった。しかし、折しもホテルで華僑の実業家が殺され、現場から逃亡した容疑者は宿泊名簿から割り出して、何と宝媛の兄だというのが。

主な登場人物ほか ネタバレにならない程度に

『枯草の根』と同じころの神戸が主たる舞台です。「陶展文もの」共通の登場人物は略します。

一部、謎解きの箇所です。ひっくり返りもしますが、一応、次のような人物として話は進みます。

●林宝媛(りんほうえん) 岩佐商事香港支店のタイピスト、二十五歳。日本語が話せる。一年前に母を亡くす。十五年長の兄がいる。兄は、浙江大学在学中から秀才の誉れ高く、十五年前、留学でアメリカへ渡った。しかし、大学をやめ、商売人になるとの手紙が届く。五年前から音信不通。日本へ行ったという噂も。一カ月の休暇を取り、観光と兄捜しに来日。北野町の陶展文の家の離れに滞在

●三浦達夫 岩佐商事神戸支店(東南ビル4階)の社員。香港支店駐在時、林宝媛に日本語を教えた
●林東策(りんとうさく) 林宝媛の兄。東京日本

橋の三電ビルに事務所を置く「オリンピア物産」の顧問。実質的オーナー。額の生え際に大きな黒子

●庫本勝一 「オリンピア物産」の代表者。竹内朝子のヒモ

●氏名不詳 「オリンピア物産」を訪れた精薄児施設の基金募集員

●竹内朝子 「オリンピア物産」創立時の事務員、二十九歳。名前だけの株主。林東策の女

●富井明子 夫の死後、数年は旅館経営を引き継ぐ、五十三歳。「オリンピア物産」の名前だけの株主

●程就信 ボルネオに本拠をおく南洋の財閥

●王同平 神戸の中山手にある四階建の大きなアパートのオーナー、四十男。かつて、香港の万成貿易

会社につとめていたが、そこをやめ、五、六年前、来日。イースタン・ホテルで死体となって発見される

●王同平の妻・弘子 二十歳そこそこ。アパートの管理人、久留島欣吾の妹

●久留島欣吾 王同平経営のアパートの管理人

●宮地多魔子 ストリップパー。陶展文の患者

早川書房版『割れる』「あとがき」より抜粋引用 (傍線は編集委員の加筆)

これは、たのしく書けた作品である。この秋はさわやかで、私のからだの調子もよかった。故障といえ、ただ指のさきがすこし荒れたぐらいである。

この作品の構想を練りはじめたころ、外人登録の切りかえがあった。われわれ外国人は、三年に

一度、登録を更新しなければならぬ。そのときに、新しい写真と指紋をとられる。神戸の生田区

役所では、指紋用インキを拭くために、ベンジンを浸した脱脂綿をくれた。私は皮膚が弱いので、

ベンジンに負けて指のさきが荒れたというわけだ。原稿用紙にむかうと、指の荒れもたいして気にならず、仕事は順調にすすんだ。早川書房の小泉太郎氏が痔で入院された…。

とまれ、十一月のはじめ、めでたく全快された小泉氏が神戸においてになったとき、この作品はすでに完成していた。私の指もおおむね原状に復して、お互いにこやかな気持ちで相見え、雨の神戸を相合い傘で歩くことができたのは、嬉しい限りであった。

三宮駅で小泉氏と別れるとき、私は彼のさげているカバンにも手を振った。そこにおさまっていた、なごやかな心の所産であるこの作品に、心から、幸多かれ、と祈ったのである。

■陶展文が、ふさぎこんで元気がない林宝媛を修法力原へ誘うくだりです。

移民幹旋所の西側に、ドライブウェイの登り口があった。追谷墓地へ行く道がわかるところにトンネルがあり…。(徳間文庫版 p.186)



再度山ドライブ・ウェイ入口
トンネル入口右に

「追谷墓地→」の案内板
(yahoo.jp/4wGui7 より)

なお、追谷墓地には陳家のお墓がある

「崩れた直線」 キャッチコピー&陳舜臣さんの「あとがき」 ほか

「崩れた直線」は、文庫本70頁ほどの、中篇という分類があるとすれば中篇です。初出は『小説宝石』1969年6月号です。手元にあるのは、廣済堂文庫『崩れた直線』（1986年）所収です。この短篇集には、「崩れた直線」を含め計8作が収録されています。ここでは、「崩れた直線」を取り上げます。

廣済堂文庫版表紙&キャッチコピー



神戸の六甲山麓にあるアパートの一室で、一人の若い男が殺された。男はカメラマンだった。犯人が狙っていたフィルムに写されていたものは何だったのか？男が息の絶える前に最後の力をふりしぼって綴った「シズカイケ」の意味するものは……。拳法の達人・陶展文の卓抜の推理がさえわたる！簡潔な文体で、成熟した人間認識から、登場人物たちの人生の軌跡がうかび上がる傑作サスペンス。

作中時間、そしてその時代

陶展文は五十歳の男ざかりで、拳法でできたからだは、鋼のように逞しく、顔のツヤのよさは、彼を年よりいくらか若くみせていた。（廣済堂文庫『崩れた直線』P.262）陶展文は五十歳で、作中時間とも、『枯草の根』と同じと思えます。

また、こんな記述があります。陶展文の甥で『桃源亭』の料理人・衣笠健次の故郷の高校の、二級下の女性が「殺された若い男」に強請られていたくんだり、

「月二万円。その子のサラリー、ほとんど

持って行かれりませんが」（同著P.314）というセリフで、私（編集委員）は、一九六五年、大学を出て、大阪道修町の製薬会社に入社したときの初任給、二万七千五百円を思い出しました。そんな時代でした。

『崩れた直線』というタイトルの意味

『崩れた直線』は、わかりにくいタイトルです。文中、ヒントがあります。陶展文が、事件の鍵となるフィルム及び焼付けられた数枚の写真を見るくんだりです。

それは荒涼とした風景である。荒野に直線を刻みつけたような、さむざむとしたシーンなのだ。よくみるとその一角が崩れていた。「石垣だな」と、彼は呟いた。「そして、崖くずれか……」（同著P.306）

廣済堂文庫版「あとがき」より抜粋引用
（傍線は編集委員の加筆）

昭和四十年代は小説の時代であったような気がする。昭和四十年代から五十年代のはじめまでは、全般に小説の時代といえるし、また私自身をみても、その時代に最も多く書いた。すくなくとも短編小説は多産であった。

作品の質は、多産だとか寡作によって左右されるものではない。もちろんテーマによる適当な形容でないかもしれないが、瞬発力を要するテーマ、スピーディーを身上とするテーマなどでは、ゆっくり書いていると、かえって質が落ちるおそれがある。たくさん書いてきたことにたいする弁明ではないが、寡作がすべて善し、ではないことを言いたい。

本書に収めた諸作品は、私の短篇多産時代のものである。読み返してみると、その時にしかなかった一種の「勢い」というものがかんじられる。作者にとってもなつかしい作品ばかりなのだ。私が直木賞を受賞（昭和四十三年下半年）したころ、それまで「御三家」（『オール読物』『小説新潮』『小説現代』）と呼ばれていた中間小説誌が、一挙に倍増した。小学館から『小説セブン』徳間書店から『問題小説』学研から『小説エース』などが出て、作家はあきれるほど忙しくなった。たまに仲間会と会うと、「よく働かされるなあ」と言い合ったものだ。

書きながら成長していくのが作家であれば、酷使というのは、じつにありがたい援助でもあったことになる。

五十代の半ばから、私は長編に力をいれて、短編小説はすくなくなつた。これからも短篇小説は書くであろうが、毎月、あるいは月に二作も三作も書くようなことはもうないだろう。その意味でも、本書に収めた諸作品は私にとって貴重なものである。

小説を読むことは、人生のはばをひろげることである。読者になにかを提供して、人生を豊かにしていただく。小説を書きはじめてから、これは私の一貫した姿勢であった。発表した作品は、一人でも多くの読者に読んでもらいたい。だが、出版界のテンポは、ますます速まり、読もうと思ったとき、すでに書店にはないのだ。

私の作品集をこんな形で出させていただくことについて、心から感謝の意を表したい。

一九八六年十月十五日

陳舜臣

「縄」三部作、及び「軌跡は消えず」 あらすじ ほか

ここでは、短編4作、「縄」三部作、及び「軌跡は消えず」を簡単に紹介します。どれも、二、三十頁の短い作品です。「王直の財宝」は本通信第43号の3頁で触れていますので省略します。

「王直の財宝」と「縄」三部作は、集英社文庫『枯草の根』に収録されています

枯草の根 目次

枯草の根……………	5
王直の財宝……………	347
『縄』三部作《単行本初収録作品》	
くたびれた縄……………	381
ひきずった縄……………	407
縄の繃帯……………	431
あとがき……………	455
解説 新保博久……………	461

あらすじ

「くたびれた縄」

貿易商コンチネンタル社神戸支店長ハミルトンは、毎年七月末の誕生日の夜、社員と主だった取引客を招待して、パーティーをひらいた。

北野天神近辺にあるハミルトン邸は神戸市を一望におさめる高台に建っていた。来客はいつも二十人たらずである。谷田というばあさんが、コックの名目で邸につとめている

が、人まえに出す料理は安心してまかせることができない。そこで、近所にいる陶展文が依頼をうけて、ハミルトン邸の台所に出張するのである。

仕事が終わりに、陶展文がハミルトン邸の使用人部屋で、村山が投げ、王、長島が打つ、阪神巨人戦をラジオで聞いているとき、庭の隅の松の木の下で、首に古いくたびれた藁縄をまきつけたハミルトン氏の死体が見つかる。

「ひきずった縄」

陶展文と朱漢生の夕涼みの与太話から、陶展文が、まだ若かった頃の中国天津での殺人事件に話は飛ぶ。

天津郊外のLという田舎町の、それも町はずれに劉岳天という漢方医が住んでいた。ひとり暮らしの四十年輩の男で、どこといて特長のない生真面目な医者であった。その医者が、雪の降った晩、広っぱの松の木に白い縄をかけて、首を吊って死んでいた。

たまたま友人を訪ねて、その町に滞在中であった陶展文は、劉岳天自殺の現場を見ることができた。彼の友人とい

うのが、その町の警察主任の弟であったからだ。

なお、タイトルの「ひきずった縄」は、積もった雪に縄をひきずったらしいあとがついていたことからつけられたと思える。

「縄の繃帯」

五十歳の夏、陶展文は家族で海水浴に瀬戸内海の小島を訪れた。そんな小島へ、知り合いの生田署の刑事がやってくる。やくざの親分が三宮の妾の家で刺殺された事件の容疑者のアリバイ調べだという。

陶展文と同じ旅館に、同じく神戸からやって来た一家が泊まっていた。一家の二人の子どもが、旅館の庭の松の木に縄をぶら下げてブランコ遊びをしていて木の枝を折ってしまう。子どもたちは、ブランコに使った縄で繃帯のように木の枝を縛った。この松の木の繃帯が殺人事件の容疑者のアリバイを崩す。



集英社文庫版表紙

徳間書店『神獣の爪』に「軌跡は消えず」と「王直の財宝」が収録されています

神獣の爪 目次

第一部	
神獣の爪……………	7
まわれ独楽……………	59
割符……………	117
描きのこした絵……………	169
第二部	
軌跡は消えず……………	227
王直の財宝……………	257
あとがき……………	287

上掲『神獣の爪』の「あとがき」で陳舜臣さんは、次のように記述しています。「第二部の二篇は、私の処女作時代の探偵役陶展文が出てくる。初登場のときは、五十代だが四十代にしかみえないという設定であった。この二篇では七十をこえている。いま書こう

「軌跡は消えず」

古希を迎え、陶展文は、仕事は妻の甥に任せ、あまり「桃源亭」に顔を出さなくなっていた。そんな頃、小児科医をしている学友の浦戸宏が訪ねてきて、一つの書類袋を置いて帰る。

袋の中身は、神奈川県S市で個人病院を経営し、昨年死んだ浦戸の兄が遺したもので、内容は、終戦の年の四月に起こった一つの事件の記録であった。

陶展文は、
（これはまたおれの詮索癖が出てきそうな気がするな）と苦笑する。



徳間書店版表紙